アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所　羅田　享

今回扱うアニメ作品：シン　エヴァンゲリヲン　劇場版

その 5

今回のテーマ

シンジの心の喪失と再生について考えていく

前回のおさらい

　エヴァンゲリオン Q においては、シンジがこれまで経験してきた相次ぐ喪失（思春期の喪失感情と結びつくもの）からニアサードインパクトの引き起こしてしまう。このことの重大さにシンジは強い衝撃を受け、苦悩する中、カヲルの世界を取り戻すという提案でエヴァに一緒に乗ってロンギヌスの槍を抜くことになる。その結果としてそれがフォースインパクの引き金をひいてしまう。そこでシンジは世界が崩壊していく様を目の当たりにする。

　シンジは自分の犯してしまった過ちを痛感し、そのことに加え、これまで強い

結びつきを感じてきたカヲルも死んでしまい、強い絶望感を抱く。シンジは絶望の中で身動きが取れず、なにか、もぬけの殻のような状態になってしまう。

　今回のシン・エヴァンゲリヲン　劇場版は、そうなったシンジの喪失に伴う心の再生と成長を描いている様に感じられる。

そこでボウルビィの悲哀の心理過程を説明した。

悲哀の心理過程（喪の作業）【J.ボウルビィ】

①無感覚・情緒的危機の段階（激しくショックをうけている）

②思慕と探求・怒りと否認の段階

（対象喪失を認めず、失った対象が存在するように振る舞う）

③断念と絶望の段階（激しい失意、抑うつ的体験）

④離脱・再建の段階（喪失を受け入れ、立ち直り始める）

①から②が妄想分裂ポジションであり、③は妄想分裂ポジションから抑うつポ

ジションへの移行段階、そして④が抑うつポジションと考えられる。

シンジは自身が犯してしまったということをうけいれず、周囲を迫害的に捉え、再び退行していくほど未熟ではないが、一方で罪の意識を感じるもどうすることもできず（エヴァ Q のサブタイトルが YOU CAN (NOT)REDO.であることも興味深い　redo:やり直すの意味)、妄想分裂ポジションに戻ることも抑うつポジションに進むこともできない。どちらの心性にもいくことができず、絶望の中で一人苦しんでいる。

　ここで、シンジの心性は妄想分裂ポジションにおける迫害不安から抑うつ不安に変化している様に感じられる。

妄想・分裂ポジションの迫害不安：外の誰か、何かしらの脅かし

→他者への恐怖であり、自身の内的な心の痛みではない　激しい崩壊の恐怖

抑うつ不安：悲哀、罪悪感、無価値、絶望、無力

→対象の喪失に伴う感情であり、対象喪失の事態に自分が関与した気づき

抑うつ不安が生じる背景には、自身の不完全さの感覚がある、それは自分の限界を知る感覚であり、万能感、万能空想の放棄→そこに悲嘆、無価値観、絶望感が生まれる。

→シン・ヱヴァンゲリヲン　劇場版（以下　シン・ヱヴァと略）の冒頭のシンジは、③の段階にある様に感じられる。

そこでシンジの心の成熟を進めていく（③→④の移行　または抑うつポジションへの移行）には、シンジ自身を受け止め、抱える環境が必要不可欠である。

２．シンジが目を覚ました時、周囲の状況はどのような反応であったか？

（Ｑと同じテーマ）

絶望に打ちのめされていたシンジが目を覚ますと、犬は人に慣れた様子で嬉

しそうに吠え、幼児は無邪気に好奇心を抱いて見つめていた。そして白衣姿のトウジが心配そうに接していた。周囲の人々もシンジを温かく迎え入れる。トウジの家では皆が食事を食べたり、お酒を飲んだりして和気藹々としていたが、シンジは部屋の片隅で一人離れた状態で両膝を抱え込んだままうずくまっていた。しかし、皆シンジの存在を気にかけていた。

その食事会でトウジの義父はシンジが食事を摂らないことに怒鳴り出すが、それはシンジのことを考え、社会で関わっていくために大切な術を諭しているようにも感じられた。そこからシンジの人格否定に発展していくことなく（怒鳴り出すと往々にしてそうなるものだが)、周りもきちんとフォローしていた。このように第三村の人々はシンジにとって大変受容的な環境を作っていた。

その点をQと比較すると、Qでは冒頭部の鈴原サクラが未確認生物のような対応をし、ミサトをはじめとするWILLEの人たちは殺伐とした雰囲気でシンジを「みそっかす」扱いし、主体性が剥ぎ取られ、彼の存在を受け入れられていない空間となっていた。この点において対照的である。

１）シンジが覚醒後、アスカとの対面そしてその後のシンジとのやり

とり

　シンジは覚醒後初めてアスカに対面する。その時アスカは裸の姿であったが、シンジは全く興味を示さず、アスカの付属物にのみシンジは反応するのみであった。そのことでアスカは腹を立てるが、ここで

「アスカとシンジの心のすれ違い」が生じている。

・アスカはシンジに対して自分の方をむいて欲しいと感じている

・一方でシンジは喪失が受け入れられず、自分しか見られない。

　まだ心が未成熟なアスカはその様なシンジを受け入れられず、怒りを感じると共に、なんとか振り向かせたい、以前のシンジに戻って欲しいという思いもあり、その葛藤をシンジに直接的にぶつけてしまう。殻に閉じこもったシンジは為す儘(まま)の状態となり、シンジとアスカの関係はサド・マゾ的、支配・被支配の関係になっている。それは、肛門期的関係であり、成熟した恋愛関係とは言い難い状況にある。そこでアスカは全く食事も摂ろうとしないシンジ（現実を受け入れられない象徴でもある）に郷を煮やし、強引にレーションをシンジの口に押

し込もうとする。そこでシンジはケンスケの家を飛び出したが、その行動は、この歪んだ関係が続き、アスカ対等な関係になれないと感じ、咄嗟に起こした行動と思われる。

　シン・エヴァではシンジの心の成長に加えて、サイドストーリーとして二人の恋愛模様もこのアニメでは描いているように感じられる、と述べたが、この時点で二人の関係は、すれ違っており、共に未成熟であり、相思相愛の関係性とは言い難い。

　後に帰って来たケンスケは、ある意味、アスカとシンジの関係が決裂してしまったことを理解している。彼はどちらを責めるわけでもなく、シンジ、アスカどちらに対しても暖かく見守っているのが、非常に印象的である。

ここでアスカは「どうせやることなすこと裏目に出て、取り返しがつかなくなって、全部自分のせいだから、もう何もしたくないってだけでしょ。」と言っているが、それはシンジがこれまでの様に妄想分裂ポジションの心性で自分の殻に閉じこもって心の退避をしているということ述べているが、この時点のシンジ

は果たしてこれまでと同様に心の退避をしているのだろうか？

３．綾波は市井の人々との関わりの中でどの様に変わったか？

一見表面的には、その様にみえるが、周囲の受容的な環境の中でシンジの心は育まれていると感じられる。それを象徴しているのが、綾波が（そっくりさん）が市井の人々との関わりである。市井の人々との交流を通じて、彼女は今までとは違った、新しいものを取り入れている。綾波をシンジの写し鏡と捉えたとき、綾波の変化はシンジの心の変化を表しており、綾波が人との交流を通じて、主体性を確立していった様に、再建の段階にシンジの心は進みつつあるのではないか？と考えられる。

（つまり悲哀の過程の④離脱・再建の段階（喪失を受け入れ、立ち直り始める））

その具体例…

１）委員長（ヒカリ）が授乳をしているところで、綾波が色々尋ね、自分には授

乳ができないことを知り困惑するシーン

綾波：分からない。綾波レイなら、どうするの？

委員長：あなたは、綾波さんとは違うんでしょ？　だったら、自分で思ったことをすればいいの

　レイの瞳が見開かれた。今まで考えようともしなかった設問に、彼女はしばし無言になる。

綾波：違って、いいの？

２）畑仕事した人たちと一緒に風呂に入るシーン　１

「風呂って不思議。ＬＣＬと違って、ポカポカする」

「私、命令がないのに生きてる。なぜ？」

３）親子が、手を取り合う姿を見て綾波が問うシーン

綾波：あれは、なに？

委員長：そうね、仲良くなるためのおまじない

そう言うと委員長はそっと右手を差し出し、綾波は右手を、そこに重ねる。

４）畑仕事した人たちと一緒に風呂に入るシーン　２

綾波：私の名前？

人々１：うん。いつまでも〝そっくりさん〟というわけにもいかんからねえ

人々２：先生の話やと、自分の名前を忘れとるそうやけど、じゃったら自分で新しく付けたらどうなの

綾波：名前、付けていいの？

4. シンジの心は綾波との交流の中でどう変化していったのか？

１）まず、綾波とシンジの対話

綾波：碇君はなぜ、村に戻らないの？

綾波：碇君も、ここで何もしてない。あなたもこの村を守る人なの？

　シンジは微動だにせず膝を抱えて座っている。そしてなにか今まで貯めていた思いを吐き出すかの様に激しい口調でいう。

シンジ：守ってなんかいない。何もかも僕が壊したんだ。もう何もしたくない。話もしたくないんだ。もう誰も来ないでよ！　僕なんか、放っておいてほしいのに！

シンジ：なんでみんな、こんなに優しいんだよ

綾波：碇君が好きだから

　シンジは、はっと息を呑んで綾波の方へ振り返る。

綾波：ありがとう。話をしてくれて。これ、仲良くなるための、おまじない

　綾波はシンジを見つめ、そっと右手を差し出す。シンジは堪えきれずに、嗚咽して泣き出す。

【考察】

ここは心が成長した綾波がシンジを包み込んでいる。シン・エヴァではシンジを取り巻く人々は、皆、彼に対して温かく優しく接していたが、それゆえにシンジは自分が犯した罪は決して許されるものではないと考え、殻に閉じこもっていた様に感じられる。けれども本当はシンジは自分のその苦しい思いを受けてめてほしいし、共有したいと感じていた様に感じられる。

　「誰も来ないでよ」「放っておいてほしい」と強く言ったシンジだが、自分の苦しみなんて、結局誰も受け止めてくれやしない、触れられて、これ以上傷つき

たくないからこそ放った言葉であったと考えられる。

　だからこそ綾波の言葉「碇君が好きだから」「ありがとう。話をしてくれて。」という言葉は非常にシンジの心を揺さぶったのではないだろうか？

→シンジは心を閉ざすことをやめ、トウジやケンスケが暮らす生活に入り込んでいった。それはシンジが現実世界を受け入れ、今後立ち向かうであろうシンジのエディプス葛藤への第一歩を踏み出したとも考えられる。

２）シンジはケンスケに連れられて、ケンスケの父の墓参りをするシーン。

ケンスケ：ありがとう。朝から付き合ってくれて

ケンスケ：ニアサーを生き延びた親父が、まさか事故であっさり死ぬとは、その時はまるで思わなかったな。こんなことなら、ちゃんと話をして、酒でも飲んで、愚痴の一つも聞いときゃよかったよ

ケンスケ：お前の親父は生きてるだろ？　無駄と思っても一度は会って、きちんと話せよ。後悔するぞ

アスカ：そんなのこいつには重いわよ。あの碇ゲンドウじゃ

ケンスケ：しかし、親子だ。縁は残る

【考察】

ケンスケの言葉。ここでは次のテーマの導入として描かれている様に感じられる。抑うつポジションへの心性を語る。そしてエディプス葛藤にシンジが向き合おうとする前振りの様に感じられる。

ケンスケの父の墓でお参り→父を乗り越えて一人の成熟した大人になったケンスケの姿（父親殺しの象徴）

３）綾波の喪失

綾波：おはよう

シンジ：おはよう。どうしたの、こんな朝早く

綾波：碇君に会いたかった

シンジ：これ

黒い音楽プレイヤーをシンジに差し出した。

シンジ：あ、ありがとう

シンジ：あの、頼まれていた名前なんだけど――綾波は綾波だ。他に思いつかない

綾波：ありがとう。名前、考えてくれて。それだけで嬉しい。ここじゃ生きられない。けど、ここが好き

シンジ：綾波？

綾波：好きって分かった。うれしい

シンジ：綾波、どうしたの？

綾波：稲刈り、やってみたかった

綾波：ツバメ、もっと抱っこしたかった

綾波：好きな人と、ずっと一緒にいたかった

綾波：さよなら

シンジ：綾波！

　別れの言葉の直後、レイは息を引き取るように瞳を閉じ、綾波は爆発し、そこにはLCLに濡れたプラグスーツのみがあり、シンジはそのプラグスーツを抱いて静かに泣き出す。

→綾波との対話後、綾波喪失　そこでシンジは再びエヴァに乗る決意を固める、

5. ヴインダーに乗り込んだシンジは以前に比べてどの様に変わったのか？

　シンジはアスカに気絶させられ、目覚めたときはQでシンジが目覚めたときの様に担当医務官の鈴原サクラが彼の様子を覗き込んだ。その後、「勝手に出ていって、あんだけ乗らんといてゆうとったエヴァに乗りくさって、アホ！　ア

ホ！　碇さんのドアホ！」という様に、一方的にまくし立てる言いながら、途中感極まり、シンジの胸にすがって泣き伏す。その様子は、Q の様な恐怖とも怯えともつかない様子とは違っており、アスカに「女房か、あんたは」と呆れて言われた様に、サクラはシンジに対して愛憎まみえる心情を抱いていた様に感じられる。

　このサクラのシンジへの関わりが象徴的だが、ヴィンダーの乗組員はミドリの様にあからさまに彼に対して憎しみを抱いている人もいる一方である程度シンジの存在を受け入れつつある様に感じられる。

そのやりとりをいくつかとりあげてみる。

１）ヴィンダーでアスカがマリへの再会のシーン

マリ「By the way，ワンコ君との進捗どうだったん？」

アスカ「べつに、興味ない」

マリ「ほう。年頃の男の子は眼中にないと」

　携帯ゲームをしながら、アスカは突き放すように言う。

アスカ「ガキに必要なのは恋人じゃない。母親よ」

【考察】

　これまで、この番組でシンジが現実を受け止め、心の成熟を進めていくには、生きていくにはシンジの心を受け止めていく母親の様な存在が必要であるということを何度か述べてきたが、アスカはそのことを話している様に感じられる。

　そしてマリの問いにアスカは戸惑い、強がっているが、自分はシンジの心を母親の様にきちんと受け止められなかったと話している様にも感じられる。

　そしてそこが、この３）の戦闘配備前にアスカがシンジに会いにいくシーンにつながってくるものと考えられる。